

科目名	子ども思想史特論	副題	
担当者	石橋 哲成		
開講期	前期	単位数	2単位
			配当年次
			1・2年次
授業の概要	<p>「子ども」という存在は、教育思想史の中でどのように捉えられていたのでしょうか。本講では、ヨーロッパ中世における子ども観を最初に取り上げ、その後ルネッサンス期を経て、近世において子どもがどのように捉え直されるようになったのかを見ていく。今日の子ども観の先駆けとなったのは、ルソーであった。ルソーが「子どもの発見者」と言われる所以である。その後ルソーの影響を強く受けた、ペスタロッチー、さらに「幼稚園」の創立者となったフレーベルや「子どもの家」を創立したモンテッソーリが現れた。それぞれがどのような境遇の中で、どのような子ども観を獲得していったのかを考察する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. ヨーロッパ中世の子ども観はどのようなものであり、それに対して、ルソー、ペスタロッチー、フレーベル、モンテッソーリは、どのような子ども観を獲得していったのかを理解する。 2. その理解の上に立って、受講者各自も自らの子ども観を確固たるものにしていくこと。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション ― 子ども思想史を学ぶ意味		
2	ヨーロッパ中世における人間観・子ども観		
3	ルネッサンス期における人間観・子ども観		
4	近世における子ども観の概観		
5	ルソーにおける子ども観の成立過程		
6	ルソーにおける子ども観と教育観		
7	ペスタロッチーにおける子ども観の成立過程		
8	ペスタロッチーにおける子ども観と教育観		
9	フレーベルにおける子ども観の成立過程		
10	フレーベルにおける子ども観と教育観		
11	モンテッソーリにおける子ども観と教育観		
12	西洋の新教育運動における子ども観と教育観		
13	シュタイナーにおける子ども観と教育観		
14	ランゲフェルトにおける「子ども人間学」		
15	受講生による研究発表：子ども思想史と幼児教育		
期末			
授業に関する連絡	授業は原則として講義形式で行うが、途中で演習形式でも行う。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回の小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	授業内の議論に対する積極的な参加を求める。		
テキスト	事前に授業資料を配布する。		
参考文献	<p>ルソー著/今野一雄訳『エミール（上）』/岩波書店/2012（第80刷） ペスタロッチー著/前原・石橋共訳『ゲルトルート教育法・シュタンツ便り』/玉川大学出版部 フレーベル著/小原國芳訳『人の教育』（『フレーベル全集第2巻』）/玉川大学出版部</p>		